

「総合的な学習の時間」における PBL 教育

杉原 米和*

1 はじめに

中学校学習指導要領の第4章「総合的な学習の時間」第1目標には、以下のように書かれている。

「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。」

この観点から、PBL教育の特長である①「探究的、教科横断的学び」②「主体的協働的学び」③「社会参画への意識の向上」が、「総合的な学習の時間」にふさわしい学習内容であると考えられる。

本稿では、PBL教育の教育的意義と、具体的な実践例を説明し、その可能性について論究したい。

2 主体的な学びについて

エーリッヒ・フロムは「逃げの症候群」として「何かに依存すること」「命のないものに関心を持つこと」「自己中心的なナルシズム」の三点を指摘している。

これは、責任回避、自主性の欠如、ファミコン・SNSへのこだわりなどの、現代の風潮にもあてはまるのではないだろうか。現代の社会状況の中で、学校現場でも無気力生徒は増加している。生徒の学ぶ意欲の掘り起こしは、今まで以上に重要になっている。学校での学びにおいて、実生活や実社会の中で、自身の在り方や生き方と関連付けて内省的に考える力が求められている。その力を、「総合的な学習の時間」の中で、①課題の設定②情報収集③整理分析④まとめ・表現の、探求のプロセスを通して育成することができると考えられる。

PBL教育は、米国ミネソタ州の「ミネソタ・ニューカントリースクール」というチャータースクールをモデルに開発された、学びの欲求を呼び起こし、個別にサポートする教育方法である。

米国では、教育界だけでなく、産業界や地域社会でも評価を得ている。

筆者の前任校（東洋大学京北中高・白山高校）では、学校改革の柱としてPBL教育に取り組んだ。その取り組みは、やる気を引き出す高校事例としてリクルートの「キャリアガイダンス」(2003. No1)に掲載された。高校現場での、PBL教育の導入の過程をたどりながら、教育的意義について説明したい。

* メディアコミュニケーション学部 非常勤講師

2002年に、千葉大学の上杉賢士教授を招き、日本で初めて京北学園白山高校でPBL教育を実施した。「京北商業高校」から「京北学園白山高校」に校名変更して、学校改革の柱としてPBL教育に取り組んだ。

上杉教授は、小学校教員、指導主事、小学校教頭を経て、千葉大学教授に。日本生徒指導学会事務局長、千葉総合的学習研究会を主宰されていた。

上杉教授は、導入時に「日常生活と学校で学ぶ内容の乖離を何とかしようというのが、総合的学習が登場した理由の一つ。学校で学んだことが暮らしに役立ち、暮らしの中で考えたことが学校で生きる。両者の溝は、PBL教育などを通して生徒に伝えることで必ず埋まると確信します」と本校の教員に話された。

3 テーマについて

PBLのテーマは、現在、生徒が最も興味や関心をもっていることややってみたいことから選ばれる。生徒同士でブレインストーミングさせて協力させるのも有効である。基本的に個人かグループで決めて取り組む。グループの場合、大人数の実施はしない。他に依存する傾向が出るからである。

身近な話題をテーマにすることで生徒の意欲を引き出す。ただ、テーマ設定や計画立案の際に「このプロジェクトがあなたや社会にどう役立つのか」「達成のために勉強しなければならない教科はなにか」と生徒に問いかける。これは、学習指導要領にある「積極的に社会に参画しようとする態度を養う」ことにつながる。あなたの学習成果が自分の人生や地域社会・世界に対してどう貢献するかは、生徒にとっても新鮮な問いかけでもあった。

また、この視点は、東洋大学の創立者である明治の哲学者の井上円了が大切にしていた、学んだ事を社会に「還元」していく理念とも、重なるものであった。創立の理念とPBL教育の目標が、

偶然にも一致するものとなった。

まず、テーマ決めをする前提として、個々の興味関心を尊重し、固有な価値観を大切にしようとする。

学習指導要領にも「実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする」とある。

課題の設定は、自分事として、主体的な学びを進める上でも重要である。

白山高校の場合も、講師として招いた上杉教授は、アイスブレーキングとして、詩「しあわせ」（レイフ・クリスチャンセン文・にもんじまさあき訳・ディック・ステンベリ絵 1995）を通じて始めた。8連からなる詩の中で、生徒自身の幸せ感に近いものを選ばせた。そこで、それぞれの違いを尊重することを確認した。話し合いのルールは①批判禁止②質問OKという単純なルールだけだった。

「しあわせ」
しあわせってなに
夏の太陽
それとも 降りつづいた
雨の太陽だろうか

しあわせってなに
勝つこと
それとも
ベストを尽くすことだろうか

しあわせってなに
つぎつぎと成功を収めること
それとも
できないとあきらめていたことを
やりとげることだろうか
以下省略」

なかなか自分の意見を集団の中で言えない生徒

にとっては、それぞれが個々の価値観を大切にしていって、批判しないというワークは、導入として有効であった。

4 企画書の作成

次に、企画書の作成である。①プロジェクト名を考える②追究のプロセスを考える。

②に関しては、プロジェクト完成のために、どのような活動が必要であり、どんな順番で行えばよいかを考え活動計画を立てさせる。

白山高校では、HR、総合的学習の時間、国語科授業を中心として社会科、商業科の「情報処理」の時間を使い作成した。HRでは、担任が生徒との個別面談を通してプロジェクトの進行を支援した。プロジェクトを支援する教員は担任だけでなく、副担任、管理職（校長・副校長）も担当した。PBLの時間になると、指定された教室に生徒は分かれてプロジェクトを進める。大学のゼミのような関係である。テーマの内容によっては、他学年のそのテーマに詳しい教員や、スポーツ関係のテーマでは部活顧問にもアドバイスをもらった。学校の人的資源を最大限に活用しようと工夫した。

学習指導要領でも「目標を実現するにふさわしい探究課題について、学校の実態に応じて、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題の対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の将来に関する課題などを踏まえて設定すること」とある。白山高校は商業課程の学校であるため、商業科の授業（情報処理）を使うことで、より広いテーマを扱い表現することができた。

PBL教育では、学習過程において、教師は良きアドバイザーとして関わる。教師も、黒板とチョークだけの一方向の授業を見直し、生徒中心の授業、他教科との連携という新しい試みが始まった。教科横断型の取り組みによって、生徒のニーズにも応えることができた。

PBL教育は、学校を豊かな情報資源の場と考える。例えば、生徒のテーマが身体の発達のことであれば養護教諭からもアドバイスをもらう。また、地域や保護者の方からも情報収集する。また、学習指導要領に「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会的教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと」とあるが、特に図書館の活用や、夏季休暇の中での博物館見学も実施した。

5 ゴールについて

ゴールの設定は、極めて重要である。予定された時間数の範囲内でどのような状態になれば完成といえるかを生徒に考えさせる。入門期は、10時間程度から始めて、経験を蓄積するにつれて、より長時間のプロジェクトに取り組むように指導する。

例えば、「地域新聞を作ろう」というテーマならば、仮に10時間の学習時間ならば、どういう状態になれば完成といえるのかを生徒自らが考える。「地域の人に読んでもらって、反応があれば成功」とか。この、時間管理の能力は、将来の自己マネジメントの上でも重要になる。

また、大きなテーマを設定した場合、その実現のためにゴールを分割する。限られた時間の中でできることをゴールとする。例えば、「海外留学プロジェクト」ならば、「海外留学準備プロジェクト」とする。

6 生徒と教師の関係性について

PBL教育は、生徒と教師の関係性の質を変え深める効果がある。従来のように、教師が一方向的に授業をするものではない。むしろ、アドバイザー（傍らに寄り添った案内）役として、生徒自らの学びを支援し促進する立場にある。そのため、教師も認知の地平を広げ、世界そのものがカリキュラムであるという大きな視点をもたなけ

ればならない。そのように、広い視野から生徒のプロジェクトの実現を支援する。アドバイザーは、質問と必要に応じたアドバイスを重ねて、生徒がより豊かなイメージをもてるように働きかける。

教師は、まず、生徒の「プロジェクト学習企画書」の作成を通して向き合う。その際には、教師はアドバイザーとして以下の点を生徒に意識させる。教師からの質問によって、生徒は学びの価値に対する理解を深めていく。

① プロジェクトの意義を意識させる。

学習の成果が自分の人生や地域社会・世界に対してどう貢献するか。プロジェクトの価値を自らの生活や生き方、社会の貢献の2点から考えさせる。

② ゴールのイメージをもたせる。

限られた時間の中で、どこまでをゴールとするかを考えさせる。

③ プロセスのイメージをもたせる。

時間を追って、具体的な活動を書かせる。

④ プロジェクトを進める中で、インターネット・書物だけで終わるのではなく、「実在の人物」からの聞き取りをさせる。聞く力、まとめる力を育てる。情報源として実在の人物の活用という条件を入れたことで、単なる「調べ学習」に終わることを防ぐことができた。

⑤ 教科学習との関係では、このプロジェクトを進める上で、特に力を入れて学ばねばならない教科を考えさせる。

⑥ ポートフォリオを作成して記録をとり、日々の取組について達成度を書かせる。今日のまとめ、反省、次の学習目標を書かせる。この段階でも、教師はアドバイザーとして関わる。

⑦ 取組の途中とプロジェクト終了後に振り返りの機会をもたせる。最後に、学年や学校などの、全体への発表の場を持つ。そして、記録集の発行と、保護者や地域の方達へも発表会に招待する。ミネソタ・ニューカントリースクールでは、保護者だけでなく市民も参加できる会で、生徒がプレゼンテーションをする。

7 PBL 教育実践例 白山高校 (現在の東洋大学白山高校) の場合

白山高校は、明治時代の哲学者井上円了が、1887(明治 20)年に哲学館(現東洋大学)を設立したことに始まる。そして社会で必要な実業教育の場として白山高校の前身京北実業学校が1908(明治 41)年に文京区(現東洋大学白山キャンパス)に設立された。

新学制が実施されて京北商業高等学校となり、2002(平成 14)年に校名を変更し京北学園白山高等学校となった。

2011(平成 23)年 4 月には学校法人東洋大学(創立者が同じ井上円了)と合併し、それまでの白山高校とは違った新しい教育をスタートさせた。

教育改革の取り組みは、先ずは校名変更から始まり、カリキュラムを大幅に変更することで生徒のやる気を喚起し、大学進学の実績も大幅にアップした。以後、文系大学進学を目指す商業課程のある進学校として進学実績をあげた。

その学校改革の中心として、千葉大学と連携して、大学教授の出前授業や大学の卒論発表会を行うなど生徒の意欲を高める「新しい教育」に取り組んだ。白山高校は「学力と人間力」の両方の育成、「進学指導」と「特色ある人間教育」の「二兎を追う教育」を目指した。

白山高校は、PBL(プロジェクト・ベース学習)や「課題研究」を中心とした、生徒の意欲を高め自信をつけさせる人間教育、それを土台として、それぞれ生徒の進路実現を応援した。

当時の生徒たちの状況は、自己肯定感の低い生徒も多く、学びの意欲を伸ばす取り組みが必要とされていた。この自己肯定感を高める教育の取組は、今日でも必要なことであろう。

学校改革の柱は、次のとおりである。1. 進路設計する力を育てる 2. 意欲を育てる探究型の学び(「PBL」、「課題研究」等)の実施 3. 専門的職業人への挑戦。

先ず、教育改革の1点目は進学指導の強化である。土曜日と朝の時間を大きく変えた。毎土曜は、授業と特色あるキャリア教育を実施した。「朝学習」で学習習慣づくりをし、「英・国・数」の順で10分間テストを実施した。これは1年から3年生まで同じ時間に実施し基礎学力の定着をはかった。又、実力テストの回数を増やし、教員の分析会を持ち、ベネッセファイナンスシステムという生徒一人一人の個人データ（カルテ）を活用して生徒との進路面談を細かく実施した。その他にも進学指導のために生徒の大学訪問、進路講演会、保護者のための講演会も実施した。夏は1年生全員が河口湖にある東洋大学セミナーハウスで勉強合宿を実施し、又、1～3年まで共に10日から2週間ほどの講習を実施した。そのほかにも検定資格取得のための英検、情報、簿記講座を実施した。

2点目は、キャリア教育の推進である。本校のキャリア教育は、生徒自身が自分の良さや可能性に気が付き、夢を持ち、その実現に向けて努力することを援助することである。

PBL教育をその中心として進めた。それをあらゆる教科で支援した。土曜日を中心に生徒の興味関心を引き出し、主体性を養う「CUD（キャリア・アップ・デー）」という取り組みを始めた。授業だけでなく、PBLの発表会、資格取得講座、社会人や大学生による「ようこそ先輩講座」、面接指導、課題研究特別授業、大学の先生による進学講演会等を実施した。又、土曜日の放課後、東洋大学留学生との交流会「レッツ・チャット」（英語で話そう）を3回実施。又、大学や専門学校見学・インターンシップ、博物館見学、保護者対象講座として「パソコン講座」や「親子関係講座」を実施した。

3点目は、資格取得である。英検、漢検、数検、全経簿記、情報検定、全商簿記、日商簿記に取り組んだ。

8 高大連携の試みとPBL教育の可能性

『全私学新聞』でも、「新世紀を拓く教育」と題

して「京北学園白山高等学校は、米国のミネソタ・ニューカントリースクール（チャータースクール）で行われている学習プログラム『プロジェクト学習』を平成14年度から導入した（平成16年3月3日号）」と紹介された。PBLとは、自主学習のための一方法で、テーマと目的を定め、その追求のプロセスを体験学習や問題解決学習によって構成するものであるが、生徒たちは、自分の可能性を確信し、将来の進路への展望や希望を抱くようになると紹介された。

京北学園白山高校では、PBL教育により生徒と教師の関係が変化し、生徒が自信を持ち学ぶようになった。本校でのPBLは平成14年9月9日の千葉大学教育学部の上杉賢士教授による解説と企画書作成の2時間の授業から始まったのだが、このような高大連携の取組は、中高の学校改革の上でも有効である。大学生徒の交流も、生徒に学ぶ刺激を与えた。

実施の過程で、学年所属の担任団と教科が授業の一部やホームルーム、放課後などを利用して取り組んだ。その為に、普段は教科がバラバラになりがちなのだが、PBL教育の実施の過程の中で、良い協力関係が生まれた。教師集団をまとめる効果もある。

プレゼンテーションの前日などは、夜遅くまで、教師と生徒がプロジェクターを使い真剣に予行演習をしている姿が印象的であった。

PBL学習は、自分が関心のあることであればどんなテーマでもよく、グループでも個人でも取り組んでもよい。「少年法」に取り組んだ生徒は、それを更に学ぶために、大学の法学部に進学した。学びの出発点は自分のなかにあるのである。

また、生徒の「自信」を育む環境作りにつながった。生徒の中で「自分は、たいしたことない」とか「俺ってダメなやつ」など、自分自身にマイナスのレッテルを貼ってしまう生徒がいる。残念なことである。そんなレッテルをはがし、生徒たちが「やればできる」と、学びの主人公になれば、学校が生徒自身の居場所になる。「今まで何をしてきたか」よりも「これから何をしたいか」

に焦点を当て、自信を持って学ぶ支援をするのが PBL 教育である。生徒自らの進路を考えさせ、学びの過程で自信と可能性を育てる教育である。

参考文献

エーリヒ・フロム『自由からの逃走』日高六郎訳 創元社
佐藤学『「学び」から逃走する子供たち』岩波ブックレット No524 岩波書店
上杉賢士『総合学習進化論』明治図書
ロナルド・j・ニューエル『学びの情熱を呼び覚ます

プロジェクト・ベース学習』上杉賢士・市川洋子
監訳 学事出版
『私学の挑戦 The 授業』Volume3 CAL（最先端学習センター）銀の鈴社
『キャリアガイダンス 特集やる気を引き出す』2003. No.1
『全私学新聞』「新世紀拓く教育（17）」2004.3.3
上杉賢士・市川洋子『プロジェクト・ベース学習で育つ子どもたち』学事出版
『プロジェクト・ベース学習の実践ガイド』上杉賢士 明治図書
上杉賢士『教育学術新聞』「PBL 情報化社会の新たな学習法」2009（2362・2363・2364）